

1970年

# 幼児教育に望む

— 母親の立場から —

浜田駒子



「一九七〇年の幼児教育に望む」の題を与えられたが、幼児教育は、家庭教育と幼稚園（保育園）教育の両面から考えられるので、はじめに、私自身を含めた母親の態度、姿勢について考え、次に幼稚園教育についての要望を記すことにする。

## ○ 失なわれていく自然

次男のお世話になっている幼稚園の先生に「この頃の子どもに、一番欠けているものは何ですか」と、うかがったら「たくましさです」と、おっしゃった。

現在、都会及びその周辺で、日に日に子どものたくましさを育てる要素が少なくなつて来つつある。自然が、子どもにおどろき、やさしさ、たくましさを育ててくれるということは誰でもが知っていることであるが、現実の生活はどうか。家は狭い。子どもは少人数で過保護である。交通激化と遊び場の不足など、もう

いい古されたことばかりだが、一向に改善されるようすはない。母親たちも、自然をとり戻すために何とかしなければと思いがらどうしようもない。

## ○ 労働

幼稚園や学校で、「家事を手伝いさせるのではなく、家族の一員として自分の仕事に責任を持たせてください」と、いわれる。四歳であれば、牛乳を受け箱から冷ぞう庫へしまう仕事、小学生なら玄関を掃く仕事などである。母親は暇があるし、自分であれば、早いけれどもシィッと我慢をして子どもの仕事をつくる。子どもは無感動にいわれただけをやる。何となく不自然なものを感ずる。

子どもの小さい頃はよくカマドで燃やす杉葉や松コナ（松葉）を掃きにいった。学校の帰りに友だちと約束して帰る。カバンを

置いたら背負いカゴをしょって熊手をもって出かける。

後の方で、母親の「まだあるからいいのに」という声があるが、もうきいてはいない。

弟や妹たちの手を引いて山または浜へいく。友だちと一しょにたくさん掃き集め、背負いカゴにつめ、カゴに入らない分は四角にまとめてカゴの上に高く積み上げる。友だちがじょうずにできなければ、手伝ってあげる。木にのぼったり、ぶらさがっている弟妹たちを大声でよび集めて日暮れの道を帰る。そこには手伝いをするとか、家族の一員として自分の仕事に責任を持つとかの意識はなく、自然にやっている。しかも楽しい。

山の中の家のいろいろが、石油ストーブに変わったと新聞に出ていた。エネルギー革命はじめ、すべての生活が変わって来たから田舎の子どもたちも、だんだん、ああした生活が少なくなってきただろうなと思う。

皆と働くことが楽しい、ということが、現代の生活の中で自然に行なわれるのはどういう場面だろうか。たくましさは、この自然の中で遊び、自然に働くことから生まれて来ると信じる。何でもお膳立てしてもらって、それを無感動にやりつけているとそれが習慣になってしまふ。この頃の小・中学生に多い傾向である。いいつけられればやる、いわれなければしない。自分からやったものでないから、失敗すればいいつけた人の責任にしてしまふ。

こうした態度は無感動に仕事をやって来た結果だと思ふ。

### ○ 自分自身の頭で考えよう

子どもを育てるには、自分自身で考えることをしないで育てられる。二、三冊の育児書を買おう、ミルクの飲ませ方、風呂の入れ方、しつけのA・B・Cまでちゃんと書いてある。

あらゆる情報が発達して来て知識は氾らんしている。知識はつめ込むが自分の力で考えようとしなない。それが時代の傾向である。しかし、こういう時代だからこそ、自分自身の頭で考え、判断し、感性にまで高めて行動出来る人間が必要である。その人間をつくるのに一番大きな力になるのが母親なのだ、としっかり自覚してもらいたい。

毎日の生活は流れて行く。

子どもの背丈はいくら目をこらしても、いつ伸びたかわからない。しかし数カ月後には数センチ伸びている。結果が目に見える背丈でさえそうなのに、精神的な成長は全く見当がつかない。目にはみえないが、確実に母親の生きている姿勢が、言葉が子どもを育てているのである。

子どもをどういう人間に育てたいか、母親たちは解答をほしがる。あるいは理想は抽象的なものだから、今ここにごはんをたべている子ども、洗濯をしたものを着せているこの子と距離がありすぎて結びつかないという場合もある。

母親は、もう一押し、自分で苦しみ考え、その持っている豊富な知識で考え判断して、自分とわが子の生き方を見つけねばならない。

人それぞれだから十人十色の生き方になるだろう。それが民主主義である。自由である代わり非常に骨の折れる仕事である。

この骨の折れる仕事を母親がやってみせないと、子どももまた、何も考えないで、ただただ情報に押し流される人間になってしまうのである。

### ○ 幼稚園教育に望む

自然から遠ざかりつつある子どもを自然に返してやるにはどうしたらいいか。これは幼稚園に通わせることである。

そこにはかけ廻れる広い庭がある。とつきみ合いのできる仲間がいる。仲間といっしょに楽しく花を植えたりの仕事ができる。仲間がケガをした時、心から心配してあげることができる。こうした小さい時からの集団保育がこれから必要になり、一九七〇年代は幼稚園が非常に重要な役割りを果たすようになると思う。

そこで要望を二つ、

その一、施設について、

自然に接することの少なくなった子どもたちが自然に接する唯一の場所として広い遊び場を確保してもらいたい。緑の多い場所で抽象的な遊具よりも自然木が生えている方が望ましい。

### その二、幼稚園の数

幼稚園がもっと増えてほしい。幼稚園を自分のライフワークとして経営している人もいるが、中には金もうけだけを考えて幼稚園をはじめめる人がいる。そうした人は子どもを商品としてしか見ていないからすしづめ教室も平気だ。良心的にやっている幼稚園でさえも一つのクラスの人数をたいいて四十人としている。

文部省の幼稚園設置基準は、三歳児一〇〜一五人、四歳児二〇〜三〇人、五歳児三〇〜三五人が普通であるが、原則として四十名以下とあるので、どこの幼稚園も年長、年少ともに四十一、二名は入れるのである。

理想的な保育をしようと思っても四十名の人数を思うと断念しなければならぬ事態がいくつもあると現場の先生方から聞いている。では、教室をふやし、人数を四歳児二〇名に上げるとどうであろうか、親たちの経済的な負担が倍になるのであろう。幼稚園の教育費は他の小・中学校に比べて多いのに、その上、毎年、入園料保育料が値上げされる（私の住んでいる市の場合）。

クラス当たりの人数をへらしても経営が成り立つように国から補助、あるいは公立の幼稚園がたくさんできるように願うものである。零歳児保育、二、三歳児保育も、しきりに必要が叫ばれているのに、予算がないとして、依然として政府が関心を示さないのは不思議である。